

寺報 得源寺



第 2 号
発行 = 真宗
大谷派得源寺
住職大橋友啓
☎0767-68-2096

ぼーっと

生きてんじやねーよ!!

住職 大橋友啓

「さあ皆さん。ひとつ確認したいことがあります。シンコウと言ふ字は信じ行つと書きます。信じて行つといふことは、お参りをしたら、しっかりとお布施を行つといふことです。分かりましたか。」
「はあ〜い。」
「さあ行きましょう。」
と言つて、根本中堂に向かう坂を降りながら五・六人の女子大生をお参りに案内するタクシ一の運転手に出会つたことがある。その時は、シンコウという字は信行ではなく信じ仰ぐだよ。いい加減な事を言つなあ〜。と、思つて聞いていた。

ナムアミダブツ・ナンマンダブツ、赤ん坊にもナムナム・ナンナさん・マンマンちゃんとお念仏は色々な形でお内仏のご本尊（阿弥陀仏）の前で伝えられてきました。

念珠にしっかりと手を通してご本尊に向かつてお念仏を口にします。これが真宗の作法です。このお念仏を口にしている人が少なくなりました。

これは意味の分からないことではないといふことでしよう。まして、お念仏を声にするなんてことは「命をい」のようでかっこ悪いといふことでしよう。

お念仏といふのは、子が親の名前を呼ぶように阿弥陀様の名前を呼ぶといふことです。そこには、利害関係のない安心に包まれた世界があるだけです。

私が住職になって今月で二十三年になりましたが、お葬儀や仏事の参詣者の口からお念仏が聞こえなくなりました。

「さあ皆さん。ご一緒にお念仏いたしましょう。」
「はあ〜い。」

という人が私の周りにいったい何人いるでしょう。ひとりもないとすれば、女子大生を比叡山の根本中堂にしっかりと参りさせていたタクシードライバーが私より実践力があるということになります。

信仰という字は違つぞ!!と間違いを指摘するような理屈ばかり言つて来たのではないだろうか。

「ぼーっと生きてんじやねーよ!!」チコちゃんの声が聞こえてきます。

今は、せめて私のお念仏に合せて声を出すように心がけてください。と呼びかけるしかありませんが、ひとりでも多くの方々と「ナムアミダブツ・ナムアミダブツ」と阿弥陀様の名を呼べる日ぐらいいいなあ。と思つています。

なぜ、南無阿弥陀仏なのかは口に出せるようになってから訪ねても遅くないと思います。

へ元号へ 平成から令和へ

私たちの真宗大谷派では、今から二〇年前の一九九九年に宗務機関の発する文章は西暦を使いましょう、と内局通達というかたちで定めて西暦を使つてきています。

そのために、取り立てて今回の改正で、色々な寺務面での混乱というものはありませんでした。

昭和から平成に変わった時は、中々なじめなかつたと言われます。今回の元号は、その字面から店頭に大きく張り出されていると、何か和風の冷やし中華でも始めたのかなと思つてしまふのは、私だけでしようか。

早くも異常な気象や事件が始まりました。穏やかに冷やして欲しい今日この頃です。

お知らせ!!

(二〇一九年六月〜九月)

「三田坊主」集まれ♥

近頃、お通夜にお参りする人は、随分と若くなりました。そのためか正信偈を唱和する声が聞こえなくなりました。正信偈はしっかりと声で唱和することが何よりなのですが…。

何度か習ったという方も初めての方も、年令・性別・門徒問いません。三田位なら集中してお稽古できるでしょう。自信を持って正信偈を唱和できるように「三田坊主の正信偈」を開催します。是非、お越しください。

とき 六月一三(木)〜一五(土)

午後八時〜九時半

ところ 得源寺

持ち物 念珠・赤本(正信偈)

「こんごう参り」

この土地の習慣で、実家の親を亡くした年に集落の外に嫁でいる子たちが、実家の手継ぎ寺の「こんごう」という法要に参拝する仏事があります。親の死を起縁として、実家の手継ぎ寺にお参りをして法の座に就くことを大切にしようとする仏事で、お盆の仏事のひとつにもなっています。

拙寺では、次の予定で行います、ご兄弟誘い合わせてお参りください。

とき 七月一日(月)正午から

お斎(とき)

午後一時 法要

午後一時半 住職挨拶

ところ 得源寺

夏の祠堂経

とき 七月二日から五日

午後二時お始まり

講師 大島顕正氏

(高岡市荒屋敷)

秋の祠堂経

とき 九月一日から五日

午後二時お始まり

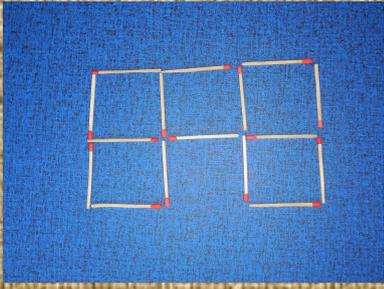
講師 寺西良夫氏

(氷見市脇)

秋の彼岸会

とき 九月二三日秋分の日

午後二時お始まり



今号の脳トレ

今回は三本を動かして五つの正方形を四つにしてください。大きさはまた全て同じです。

※ 種明かしは次号。

(このコーナーは、寺カフェからの出題です。)

前号の答え



教化冊子 真宗の生活を読む

(17〜19ページから)



筆者は、ある時「テレビを見るのは僕の自由だ」と言い張って、祖父から「お前はテレビに縛られていて、ちっとも自由じゃないではないか」と叱られたことがあったそうです。(以下冊子抜粋)

仏教の教えで「自由」とは、自らに由(よ)る、すなわち、外の環境と関係を持ちながら、それに振り回されない生き方、「自由の信念」が確立した状態をいいます。私たちがあらゆるいのちと共にいきいきと生きることから目をそらさせるさまざまなものごとについて、正体を見抜かねばなりません。そのためには、煩惱をごまかさずに認め、真実を見抜いた方(覚者)の智慧に聞いていかねばなりません。(冊子を開いて確認してみてください。)